



OVERSEAS

Paraguay —パラグアイ共和国—

海外事情【寄稿】



パラグアイの小さな町での2ヶ月間



青木 聡 AOKI Satoshi
セントラルコンサルタント株式会社
道路部/技術副主任

パラグアイの小さな町で

アスンシオン。周囲をブラジル、ボリビア、アルゼンチンに囲まれた南米大陸の内陸国パラグアイの首都である。3年前までは聞いたことすらなかった地名だ。当時、パラグアイと聞いて知っていたことと言えば、サッカー選手のチラベルトといった程度。どこに位置するのか、何語が話されているのか、人種は、宗教は…。意識さえしなかった遠い国。私にとって未知の国パラグアイに2007年の5月末より2ヶ月間、道路の施工監理に従

事することとなった。

首都アスンシオンから150kmほど南東側に「テビカル」という小さな町がある。人口は推定1,500人程度。町の主役は製糖工場で、サトウキビを満載したトラックが毎日ひっきりなしにやって来る。娯楽施設は何も無く、若者たちの溜まり場と言えば、町の入り口にあるガソリンスタンドの売店である。その町の一角に、施工監理スタッフ60人が滞在する現場事務所がある。ここが本稿の舞台。

成田からはニューヨーク、サンパ

ウロを経由し、アスンシオンへ。そこから車で約3時間。ようやくたどり着いた、地球の裏側にある小さな町の、何気ない日常の中で体験したことを紹介したい。

アサドスペシャル

パラグアイの食事のメインはマンジョカと肉である。マンジョカとはタロイモの一種で、サツマイモのような甘みのある味が特徴だ。肉は牛が一般的で、豚、鳥の順で高級品になっていく。牛肉をよく食べるためか、牛をよく見かける。町を歩くと、人よりも牛に会う機会のほうが多い。車道の上もお構いなしに歩き、時に居座るため、移動が“牛待ち”になることもある。

肉の食べ方はいたってシンプル。焼くだけである。日本のステーキよりも分厚く、一塊で焼かれ、皿に盛られる。なかなか食べ応えがある。パラグアイには、「アサド」と呼ばれるバーベキュースタイルで肉を焼き、マンジョカを食べ、お酒を飲んで仲間たちと交流を図る“素敵”な食習慣がある。私のいた事務所には大きなかまどがあって、週に一度くらいの頻度で、この



写真2 道路に居座る牛



写真3 アサド奉行



写真4 焼きたての牛の口の中

アサドを開いていた。昼くらいに「アサドやろう!」と声をかけると、仕事が終わる頃には誰かが肉を仕入れてきて、かまどに炭が準備されている。そして、決まって同じアサド奉行が肉を焼く。仕事中はみんなそれぞれの持ち場で働いているのでなかなか話をする機会が無いが、アサドを開くと人が集まる。現地スタッフたちと親しくなったのもこのアサドが大きかった。

パラグアイに滞在して1ヶ月が過ぎた頃、スタッフの家のアサドに招待された。ただ、私の知っているアサドとは少し様子が違って、焼かれているものがアルミホイルに包まれていた。不思議に思いながらしばらく待っていたら、アルミホイルの中から牛の頭が出てきた。牛頭の丸焼きだ。魚の御頭付はよくあるが、牛の御頭は、なかなか刺激が強かった。

どうしたものかと戸惑っていたら、スタッフが「ここが一番おいしいんだ!」と牛の口を豪快にあげ、30cmほどのタンを一本ものでそのまま出してくれた。ナイフとフォークを渡されて、そのタンを自分の好きな厚さに切って食べる。薄切りが好きなので薄く切ろうと試みたが、非常にやわらかく結構な厚みになってしまった。決してまずくはないのだが、タンは薄切りを焼肉屋でいただくに限る!。その後は

薦められるがまま、マグロのカマを食べるスタイルで、お肉を直接フォークでいただく。折角の招待だと思い、一生懸命食べようとフォークを向けていたのだが、赴く先は、どうしても横に添えてあったマンジョカになっていた。

テレレの力

パラグアイ人が明けても暮れても口にする飲み物「テレレ」。日本のお茶のような飲み物で、ジェルバと呼ばれる木の葉を乾燥させたものを砕いてカップに入れ、水筒の水を注ぎ、金属のできたストローのようなものを使って飲む。コーヒーやお茶のように、ジェルバにもたくさんの種類があり、パラグアイ人は自分好みのジェルバを持っている。そして、多くの人はジェルバに薬草を加えて飲む。薬草にも種類があって、まちの店で購入する者もいれば、道端にも生えているらしく、仕事の休憩時間に草むらに分け入っては、一見草のようなものを採ってきてジェルバに加える者もいる。私のいた現場は車もほとんど通らない場所で、天然ものの非常に良い薬草が採れる。が、牛たちは道端を行き来しており、道端で用を足している。現場の人々も同様に道端で用を足している。そんなところに生えている薬草を加えて飲む人もいる。

このテレレの効能はきわめて高く、ビタミンやミネラルの含有量が多いため、「飲むサラダ」とも言われているらしい。確かに、毎日肉ばかり食べている人たちにも関わらず、太っている人がさほどいないのもわかる気がする。

しかし私にとって、テレレの本当の力は少し違ったところにあった。このテレレ、パラグアイでは一つのカップを使って、その場にいる人みんなまで回し飲みをする。カップの持ち主が水を入れ、一杯目は自分で飲む。二杯目からは周囲の人に回していく。受け取った人は飲み干し、カップを持ち主に返す。持ち主はまた水を注いで次の人に回す。ここでポイントのは、持ち主に返す時。「グラスias(ありがとう)」と言わない限り、何度でも自分のところに回ってくる。

お世辞にも「おいしい」とは言えない。加えて、その辺の道端に生えている薬草入りの可能性あり。しかも回し飲み。水筒に入っている水の出所がわからない…。正直、一杯目で「グラスias」と言いたかったところだったが、「郷に入っては郷に従え」と言い聞かせ、その場を離れる必要性がない限り「グラスias」とは言わないようにした。そう続けていると、現場の人たちは何かしら私に声をかけてくれるようになった。二度目に会うと親



写真1 施工監理スタッフ



写真5 テレレ中



写真6 バレー仲間

しげに話しかけてくれて、テレレを回してくれるようになった。テレレを飲み続けた結果、現場にはエンジニアから施工業者、作業員のおじさんたちまでたくさんの知り合いができた。テレレは言葉以上のコミュニケーション手段となった。

バレーボール

日本を出発する際、一つだけこだわって持っていったものがある。バレーボールだ。やわらかいビーチボールではなく、黄色と青色の付いた試合でも使えるバレーボールである。トランクに入れるため、空気をすべて抜いてペタンコにし、空気入れと共に持っていった。先輩からの情報で、事務所にバレーボールのネットが張ってあると聞いていたからだ。パラグアイというとサッカーのイメージが強いが、意外にも現場を回っているとネットを見る機会が何度かあった。事務所にも確かにネットがあり、仕事が終わるとスタッフがバレーボールを楽しんでいた。私もボールと一緒に仲間に入れてもらった。そのボールは非常に使いやすかったらしく、私を差し置いてすぐにスタッフの仲間入りをした。おかげで私は「日本からバレーボ

ールを持ってきた人」からのスタートだった。

練習などは無く、人が集まるとすぐ試合を始める。負けず嫌いな性格もあるのだと思うが、試合はいつも白熱する。負けたチームはビールを奢らなければいけない。だからいつもみんな真剣になる。試合中は闘志むき出して戦う。そして負けたチームはビールを買って来る。(事務所の中にビールを売っているところがあって、そのビールがなぜか町の中で一番安い。)ビールを買って来た後は、勝ち負けに関わらず、ビールをみんな一緒に飲む。負けたからといって遠慮することもない。何度も試合をして、勝って、負けての繰り返し。その度にみんなでビールを飲んでバカ話をしていると、いつしか「Aoki」と名前と呼ばれるようになった。この時間が私はとても好きだった。

学校へ行こう!

事務所から30kmほど離れたカバジェロという町の現場にいた時のこと。お昼の休憩時間に町の中を散歩していたら小学校を見つけた。周囲には柵があって、入り口が小さい。中に入ってみようと思

ったのだが、勝手に入れる雰囲気ではない。何かきっかけはないのかと思っていたら、先生らしき姿を見つけた。声をかけてみると快く迎えてくれた。

校舎内に生徒はいなかった。先生は「どこから来たのか」「何をしているのか」「カバジェロは初めてか」など質問をしてきた。話をしているうちに子供たちが登校し、私の周りに集まって来た。遠目に見ている子もいれば、意味はよくわからなかったが、大きな国旗を持って来て何か説明してくれる子もいた。(ちなみにパラグアイの国旗は表と裏で模様が違う。)子供たちは意外とおとなしかったのが印象的だった。しばらくして、ある先生が鐘を鳴らすと、子供たちがベランダに整列して、朝礼ならぬ昼礼のようなものが始まった。先生から話があり、話が終わると校歌らしき歌を歌った。私も一緒に参加させてもらった。子供たちは「あの人は一体誰だ?」といった様子で、こちらをちらちら見ている。一通り昼礼が終わったところで、先生が私を紹介してくれた。不審者扱いされてもおかしくないところだが、見知らぬ異国人を温かく迎え入れ、接してくれたことが嬉しか



写真7 昼礼中



写真8 子供たちと

った。

3日後、再びカバジェロの町を訪れた際に、もう一つ小学校を見つけた。今度は生徒もいた。先生もいた。よく見ると先日訪れた小学校の先生だった。話しかけると再び快く迎えてくれた。先生の話によれば、カバジェロの町に小学校は2つあって、それぞれ生徒は違うが、午前と午後で小学校を変えて同じ先生たちが教えているということだった。今回訪れた学校は生徒数が100人ほどいて、先日訪れた学校より多い。こちらでも見知らぬ人の登場にもかかわらず、子供たちは警戒心ゼロで続々と話かけに来てくれた。こちらの生徒にはあふれんばかりの元気があった。今度は先生の計らいで授業にも参加させてもらった。自己紹介では黒板に私の名前をアルファベット、ひらがな、カタカナ、漢字で書いた。すると、「何だそれは? なぜ3つも文字があるんだ?」などと大変興味を持ってくれて、子供たちはその文字をノートに書き取り始めた。それから授業が日本語講座のようになってしまった。好奇心から訪れた小学校で素敵な思い出をいただいた。最後に先生に「グラシアス」と言われたが、

そのまま「グラシアス」と返させてもらった。

小さな町での2ヶ月間

海外旅行の行き先人気ランキングを見ても、パラグアイはまず入っていない。色彩豊かでわかりやすさが魅力の某ガイドブックでも、パラグアイはフルカラーのページが1枚もなかった。当然、テレビカルは紹介すらされていない。そんな世間的な見所は何も無い小さな町だが、町の日常に触れ、多くの人に出会い、話をし、心の通った時間を送ることができた。彼らの記憶にどれくらい留まってくれているかはわからないが、私の記憶にはこ

れからもずっと残り続けていく、素敵な2ヶ月間だった。

テレビカルの現場周辺の道はほとんどが土道である。そのため、雨が降れば至る所に水溜りができて人も車も通行が困難になる。私が訪れる数日前には大雨が降り、川が氾濫して橋を渡ることができなくなり、町が分断された。スタッフの話では隣町の現場状況を確認するため、数時間かけて迂回しなくてはいけなかったということだった。このような場所での道路整備は、住民の生活を大きく改善してくれるだろう。この道路の一日も早い完成を願って終わりとした。



写真9 大雨後の町の様子